

佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美

和歌とかなの書を理解するための鑑賞ガイド



海外からのお客様に本展をより理解していただくための鑑賞ガイドです。
日本人が持つ独特な感性と美意識が凝縮されている和歌とかなの書について紹介します。

和歌とは？

中国の「漢詩」と対比される日本の定型詩で、5・7・5・7・7の31文字で構成されます。四季や恋などがテーマとなりました。

三十六歌仙とは？

平安時代中期の歌人・藤原公任（ふじわらのきんとう）（966 - 1041）の『三十六人撰』に選ばれた36人の名高い歌人です。のちの時代には肖像画も描かれるようになり、それらは「歌仙絵」とよばれました。本展では、「佐竹本三十六歌仙絵」をはじめ、上置本・為家本・業兼本など、さまざまな三十六歌仙絵をご覧いただけます。

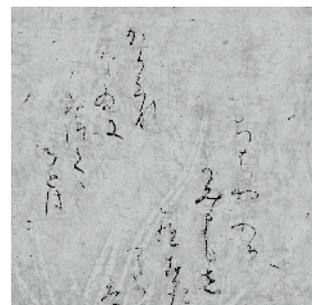
かなの成り立ち

日本では、大陸からもたらされた中国の漢字を、日本語を書き記すために使いましたが、その後、漢字の形をもとに日本語の音を表すかな（仮名）が生み出されました。平安時代10世紀頃には、公式な場で使われる漢字とともに、かなが和歌や手紙、日記や物語をあらわすために使われました。和歌は卷子や色紙、懐紙や扇子など、さまざまな形の紙に書かれました。

	漢字	現代の ひらがな
安	→ あ	→ あ [a]
以	→ い	→ い [i]
宇	→ う	→ う [u]

かなの書

平安時代中期以降、貴族社会を背景とした日本独自の国風文化が形成され、曲線を生かした優美なかなの書風が誕生しました。連綿体という文字を続けて書く書体と、行頭を揃えずに余白を残して散らし書きされたかなの書には、筆者の感性が表現されています。



重要文化財 寸松庵色紙
「ちはやふる」伝紀貫之筆
平安時代 11世紀 当館

かなの書の鑑賞と「佐竹本三十六歌仙絵」

平安・鎌倉時代の優れたかなの書は、室町時代からの茶道の流行に伴い、掛軸や手鑑などに仕立てられ、鑑賞されました。茶席で掛けられる掛軸（右図）は、本紙とあわせて表具も鑑賞の対象となります。分割された「佐竹本三十六歌仙絵」は、所有者によって趣向を凝らした表具を施され、茶席で珍重されました。歌仙の和歌、肖像とあわせて、表具もぜひご覧ください。

